

Ingo

## PORADA(ナミビア大学講師、ナミビア)の短期招請について

|       |                                                                                                                 |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者: 明治大学国際交流センター<br>公開日: 2010-03-09<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 近藤, 正毅<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10291/8063">http://hdl.handle.net/10291/8063</a>                                 |

## V Ingo PORADA (ナミビア大学講師、ナミビア) の短期招請について

理工学部教授 近藤 正毅

ドイツ、ナミビア、南アフリカのドイツ系学校で初等教育を受け、イギリスで大学、大学院教育を受けて学位を取得し、イギリス、ナミビアで各種の民間企業、官職、教職に就き、南アフリカのアパルトヘイトを経験したインゴ・ポラーダ氏はギリシア悲劇の研究の延長で日本の演劇に関心をもち、日本文化への強い憧憬を抱いて本学の国際交流基金により1か月間招聘され、学内で3回の講義を行った。

第一回は2000年11月7日生田理工学部2年英語クラスで、55名の学生に「南アフリカの文化事情」の題の下に、南アの植民地化の歴史を、地図と年代を板書しながらゆっくりと分かりやすい英語で語って、学生には初めての外国人講師による英語の講義を聞く経験となり、新鮮な感銘と、自分のヒアリング能力の不足の認識を与え大きな刺激となった。

南アがオランダ、ドイツ、インドによって植民され、その後1975年にイギリス人がケープを占有し、多くのアフリカ黒人種族が1民族として扱われたのに対し、ヨーロッパ人たちはそれぞれの国民・文化に区別され、しかも少数民族にも拘らず1913、1936年の土地法によって南アの土地の80%が白人少数民族に獲得されることになった。1959年のバンツール自治区住民法によって、人口の4分の3を占める全ての黒人は実際の居住地とは無関係に、10の黒人自治区の1つの住民にさせられ、その結果黒人は効果的に南アの市民権を奪われた。4つの白人自治区は共和国として独立し、残りは黒人州と呼ばれて様々な自治政府をもったが、政治的経済的には南アに依存したままであった。

土地というものは本来住民の共有財産であり、だれもが自由に使用できるのが自然のあり方であるが、ヨーロッパ人が植民して後、初めて土地の私有制度が導入され、黒人はそれまでの土地利用の自由を奪われただけでなく、居住の自由も失った。彼らは決して白人の土地に入ることも住むこともできず、また自分が所属しない黒人の自治区に許可された時間以外は滞在を許されなかった。南アは国際的非難の下に1961年に英連邦から離脱させられ、1985年には英米両国から経済制裁を受け、南ア政府は1986年「通行証」条例を廃止した。1993年新憲法によって黒人とその他の民族グループは公民権を与えられ、1994年の国政選挙によって黒人が多数を占める連立政府が成立し、アパルトヘイト法は終焉を迎えることになった。

第2回目は11月17日和泉の視聴覚教室で17名の学内外の教員を対象に「文化とグローバルイゼーション」の題の下に行われた。これは今日の情報技術の発達によって世界の文明

が否応なしに追い詰められている深刻な問題であるが、その先行的な実例が、欧米先進国とアフリカ旧植民地との間の南北の、政治的・経済的支配・被支配関係によって歴史的に提示されている。

南アの作家といえども旧植民地人、被差別民族である以前に1人の作家であり、ギリシア悲劇以来の運命と人間、物質文明の制度と個人の才能、イデオロギー以前に欲望や嫉妬を抱く1人の人間であるという現実があるのに、南アは先進国の批評という文化市場からはいつまでもアパルトヘイトのシンボルと見なされ、それへの抵抗と自由を求めての闘いこそ南アに課せられ、割り当てられた永遠のテーマであるようにレッテルを貼られ、分類されることは、内に政治力学を秘めた、先進国の文化産業の支配の継続であり、欧米先進国は依然としてアフリカに自国文化の同類拡散地、ディアスポラを作ろうとしているという、政治的比較文化論の構築を志向する話をして、聴衆に感銘を与えた。

旧植民地国、とくにアフリカは日本から遠い地域であって黒人と白人の人種差別の歴史を引いているために、またそれ自体古い歴史と文化をもつアジアの諸国とは異なり、本来自然人の居住する大陸で、かつダイヤモンドや金を産出したため、北方のヨーロッパ諸国の略奪の対象地になった過去からして、この欧米の文化的支配関係は、同じ英語圏ということもあって容易に解消しがたいものがある。これは旧植民地を巡る国家・文化間の影響関係のみならず、今日のインターネットによるグローバリゼーションがもたらす、言語と文化の世界均一化の先行的な見本となる文化現象である。

第3回目は11月17日駿河台研究棟第2会議室で「アソル・フュガードの演劇と南アフリカ」の題の下に、本学内外の大学教授20名余を対象に行われた。アソル・フュガードは南ア最大の劇作家であり、英米で数多く上演され、1999年秋のシーズンにはピーター・ブルックがパリの本拠地のテアートル・デ・ブッフ・ド・ノールの演目に『シズウィー・バンジーは死んだ』を選び、自ら演出したことからも分かるように、フュガードの代表作である。2000年初めには南ア劇団により26年ぶりにロンドンで再演され、タイムズ紙は差別という永遠のテーマについて語るこの作品が色褪せることはないと評した。2人の黒人俳優、ジョン・カニとウィンストン・ンチョナによって演じられるこの作品は、アパルトヘイト下の南アの過酷な人種差別の社会で、白人雇用者に反抗したためにシズウィー・バンジーはIDカードを取り上げられ、職を失ったばかりでなく、職に就く可能性も絶たれ、家族を養うこともできなければ、一家飢え死にするしかない状況に追い込まれる。シズウィーは公衆便所で小便をして偶然そこに死体を見つけ、その胸ポケットからその男のIDカードを盗み、友人の黒人写真屋、バンツの手助けで、そこに自分の写真を貼り付けてIDカードを偽造し、その男になりすまして就職しようとする。その時点でシズウィーは死んだことになる。しかしシズウィー・バンジーはおれは死人ではない。「おれは人間だ、おれは人間だ」と叫ぶ。これは1974年のロンドン初演で大成功を収め、翌年アメリカ公演も果たし、国際的評価を得た。

『ディメートス』は南アの都会で、あらゆる問題を創意工夫の才を発揮して解決し、官民両方から重宝され、尊敬されていたディメートスが都市の政治的な葛藤に嫌気がさし、都会を捨てて田舎の海辺の村に若い姪と移住し、歴史の読書と思索の静穏な日々を送り、ときに村の難事には求められて姪と協力して解決していたが、ディメートスが去ったあとの都市は混乱と沈滞が続き、都会から派遣された使者は執拗にディメートスに都市への帰還を懇請するが、彼は頑として聞き入れず、そのうちに、哲学者のように厳格なディメートスと暮らしていた姪は都会から来た使者と恋に落ち、それを見て見ぬふりをしていたディメートスはついに姪を締め殺し、孤独になったディメートスは浜辺に立って海を眺め、我が身を顧みてギリシア悲劇的な運命を観ずる。フュガードはこれはギリシア悲劇よりもカミュにつながるものだといっているが、このような実存的なテーマの作品は欧米ではあまり評価されず、そこに政治的な反抗の姿勢が欠けていると見られた。そういう批評が本国南アの観客にも影響を与えて、せっかくの土着の文学的な内容が理解されず、上演の機会も失われるという、文化的植民地の状況が生まれるとポラーダ氏は論じた。

『島』も2000年春のシーズンにピーター・ブルックの劇場で演目に取り上げられ、アソル・フュガード自身の演出で上演された。1973年フュガードは南アで「蛇の演技者」という黒人の俳優のみからなる劇団を設立した。『アンチゴヌ』の公演を続けている間に、劇団員の何人かが逮捕され、ロbben島の監獄に投獄された。その島にはネルソン・マンデラ等の政治犯が過酷な条件の下で何十年と囚われの生活を送っていた。この島の生活を主題とする作品の構想がフュガードに浮かんた。軍の厳しい統制にも拘らず、情報は少しずつ漏れ出て、徐々に芝居の場面が出来上がっていった。ジョン・カニとウィンストン・ンチョナがそれを演じたが、それは素晴らしいもので、人は黒人に演技ができるだけでなく、彼等が名優であることを知った。1975年作品『島』は大胆にも南アのポート・エリザベスで稽古をつけ、ロンドンのロイヤル・コート・シアターで上演され、たちまち大成功を収め、悲劇であると同時に喜劇でもある実人生にもとづいた痛烈な演劇を、ずば抜けた演技で観せて観客を圧倒した。その作品はアメリカへ発表の場を移して、トニー賞最高主演男優賞、最高舞台装置賞、最高演出賞を獲得した。それ以来、世界中で繰り返し上演されている。

インゴ・ポラーダ氏はアソル・フュガードの専門家でもあり、その作品の解説には英語の単語を考え考え選び、南アフリカの歴史と現実の、個人と政治のコンテクストの中から、フュガードの演劇の舞台と背景を正しく日本人に伝えようと、アフリカーナとして、また学者として、真摯に努力している内面的な姿と、思考と感性の柔軟さに触れて、遠い国の歴史と文化を背負い携えてきた講師に聴衆はなんともいえぬ不思議なアフリカの雰囲気を感じ、感銘を受けた。